



vol. 88

千葉市美術館

Chiba City Museum of Art

〔編集・発行〕
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
〔発行日〕 2019 年 2 月 23 日
〔印刷〕 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館ニュース「C'n」88号

- **特集1** 「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 BIBで出会う絵本のいま」
担当学芸員に聞きました
- **特集2** 新収蔵作品展
- **特集3** 第50回記念千葉市民美術展覧会
所蔵作品展「房総ゆかりの作家たち 特集:銅版画家・深沢幸雄を偲ぶ」
- **友の会 バスツアー報告**
- **新春の獅子舞**
- **新春 千葉のうまいもん！市**



荒井真紀《たんぽぽ》BIB2017金のりんご賞 作家蔵



館長のつれづれだより ご挨拶ー千葉市美術館の拡張・改修について

新しい年 2019年を迎え、早や1か月が過ぎました。年が明けて最初となる今号にて改めて、新年のご挨拶と旧年中に千葉市美術館に賜りました様々なご支援に対し、厚くお礼を申し上げます。

千葉市美術館は、ご案内の通り、平成7年11月3日に開館し、ご支援を頂く皆さま方のお陰をもちまして、すでに23年の年月を順調に重ね、努力相応の有難い評価を頂いております。世間で言われる「平成」の終わりにあたる時に、千葉市美術館もいま生まれ変わろうとしています。すなわち、千葉市中央区役所の移転にともない従来区役所使用の3階、4階、5階部分を活用することで、美術館活動のさらなる強化と活発化を目指し、建物の改修による活動面積の拡張等の計画を進めています。

リニューアルオープンは2020年7月を予定しています。美術館に新たに加わる、千葉市の進める文化振興活動、生涯学習活動などの空間では、いままで公開することの少なかった所蔵作品の常設展示室や市民参加、来館者参加、

とりわけ親と子が共に、美に触れ、創造することの楽しさを体験することの出来る場と機会を提供します。

しかし、それは単に新たに付け加えられた機能と空間であることに留まるのではなく、すでに20年以上にわたる企画展を中心とした展示室での活動とも常に緊密な連携性、循環性を保ちながら、全館一体となった新しい美術館活動を展開していく所存です。

そのためには、美術館に関心を持たれておられる方、美術館においでくださる多くの皆さま方からのご意見を頂戴いたしたく、また様々な面からのご支援を賜りたく、ここにお願い申し上げます。

なお、本年12月までは、現在企画中の展覧会を開催しながら、5階以下の改修工事を進めてまいります。1月からは、暫くの間休館の処置を取らせていただく予定です。休館中は、何かとご不便をおかけしますが、事情をご理解頂き、ご協力賜りますようお願い申し上げます。新しい年のご挨拶とさせていただきます。

〔館長 河合正朝〕



ワークショップの様子



千葉市美術館 外観

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

中央区役所

2020年7月
リニューアル!

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

2020年7月のリニューアルオープンに向け、千葉市美術館は2020年1月から6月まで休館いたします。1～5階をあらたに美術館スペースとして拡張、コレクションの常設展示室や、ワークショップなどが開催される体験・交流ゾーンが整備されます。新しい千葉市美術館にご期待ください。
※市民ギャラリーなど貸出し施設は利用できない期間がありますので、お問い合わせください。
※中央区役所は 2019年5月にきぼーる11階へ移転します。

あなたは何回見た？

知っているようで知らない「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 (BIB)」について、担当学芸員に聞いてみました。



【図1】ルトウィヒ・フォルペーダ《鳥たち》BIB2017グランプリ 作家蔵 © Ludwig Volbeda



【図2】ミロコマチコ《けもののおいしがてきたぞ》BIB2017金牌 作家蔵



皆川明《はいくないきもの》作家蔵

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展(=以下、BIB展)」は、千葉では定期的に開催していますが、これで何回目になるでしょうか。

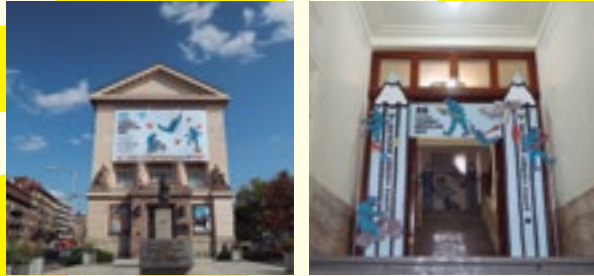
7回目ですね。BIB展が日本国際児童図書評議会(JBBY)の主催で国内で紹介されるようになったのは2000年からで、その後公立美術館が中心となって巡回展としてスタートした際に、千葉での展示も始まりました。初回は2003年秋の現地出品作品が翌年から2年間かけて国内各会場で紹介されたわけですが、その後もビエンナーレなどで2年ごとに新しいものが展示されます。千葉では1回お休みしたけれども、楽しみにしてくださる方々も多いので、その後ほぼ毎回に。

展覧会名には、毎回サブタイトルがついています。どのように決めているのでしょうか。

国内巡回展では、ビエンナーレの受賞者や日本からの出品作品に加えて、特集展示を組むのですが、内容は開催館が集まるの会議で検討した上で、現地調査チームの取材をもとに組み立てていますね。今回は、展示後半部分で「いま気になる絵本の国」として中国、イラン、イスラエル、韓国の作家を取り上げていますし、前回



【図4】ブラティスラヴァ城(右端)



BIB2017の会場となったスロヴァキア国立自然史博物館(外観とエントランス)



展示会場風景

はBIB50周年ということで、日本からの参加作品で絵本の50年を辿ろうという企画を立てました。その特集展示のテーマをサブタイトルにつけることも多いのですが、今回は日本代表作家を紹介する部分でもかなり内容をふくらませているので、「BIBで出会う絵本のいま」としました。絵本のイラストレーションの国際ビエンナーレとして開催されるBIB展は、まさに世界中の絵本の現在に出会うことができる場だと考えるからです。

なるほど。スロヴァキアで2年ごとに開催されるわけですが、現地の開催年ごとのテーマとかは無いんですか？

現代美術の芸術祭では、テーマを設定したり、参加作家を選定する監督やキュレーターがいますが、BIBにはそういったものはなく、各国からそれぞれの国の今を代表する絵本が選ばれて、送られてくるわけです。まあ、オリンピックみたいですね。原則として国際児童図書評議会(JBBY)の各国支部が代表を選んでいますが、作家選定に関わるテーマはないけれども、会期中に行われる国際シンポジウムのテーマというのが、なんとなく、その回のテーマにもなっているようですね。

ブラティスラヴァ世界絵本原画展

BIBで出会う絵本のいま

オリンピックですか！では、金メダルとか……。

金メダルは無いです(笑) グランプリ以下、国際審査員によって賞が決めます。グランプリが1人、金のりんご賞が5人、金牌が5人、出版社に対する賞もあります。子ども審査員が選ぶ賞もありますね。【図1,2,5】

「金のりんご」賞。何ですか、それ？

これです【図3】。かわいいでしょう？ 真ん中から二つに開くと、中から小さなお城、テーブルをひっくり返したかたちといわれるブラティスラヴァ城が【図4】出てくるんです。今回は、日本から参加した荒井真紀さんが受賞されました。【図5】

何で「りんご」なんでしょ？

東欧のよく知られた昔話「金のりんご」が由来とも言われています。確かに、日本人には「なげりんご?」と思われるかもしれませんが、現地の子どもたちにはきつとなじみ深いものなのでしょ。

ところで、絵本の原画って、どうやって作るんですか? 原「画」というくらいだから、やっぱり画家の仕事なのでしょうか。

いろいろですね。先にお話があって、そこに画家が絵を描くこともあるし、その逆もある。画と文の両方をつくる絵本作家も多いです。絵を描くというよりは、絵本のイラストレーションをつくることといったほうがいいかもしれません。その方法は本当にいろいろで、画家だけの仕事とはいえません。今回の展覧会では、そんな絵本づくりの舞台裏も紹介しています。

楽しみです。オリンピックだけあって、日本代表作家の作品は知っているものも多いです。でも、海外の作家さんはどうかなあ……。

海外の絵本やイラストレーターには、なかなか触れる機会がありませんね。翻訳紹介されるものには限りがありますし、「今」という意味ではタイムラグもあります。だからこそ、ここで出会ってほしい。絵本というものに対するイメージが変わるかもしれません。【図6】

【話し手：学芸員 山根佳奈】



【図5】荒井真紀《たんぽぽ》BIB2017金のりんご賞 作家蔵



【図6】ヴァリ・ミンツィ《ガリラヤ湖の小さなクジラ》作家蔵 © Vail Mintzi



【図3】金のりんご賞のトロフィーと賞状



ナゲス・モハンマディ《わたしは一面のシカでした》BIB2017金のりんご賞 作家蔵 © Narges Mohammadi

新収蔵作品展

新収蔵作品展の見どころ

新しい年が始まりました。「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」の同時開催展として、新収蔵作品をお披露目いたします。近年収集した作品約80点を一挙公開！初公開となる作品を中心に、ごく一部を紹介しましょう。

展示は三つの収集方針にそって構成されます。まずは「房総ゆかりの作品」から、ジョルジュ・ビゴーの油彩画や水彩画をご覧ください。明治期の日本を活写したことで知られるビゴーは、明治20年代後半を稲毛に過ごしました。海辺やアトリエ付近を描いた作品から、日本を見つめる画家の視線や往時の景観が想像されます。ほかにも安房を拠点とした洋画家小林猶治郎、御宿や茂原で活動した木版画家船崎光治郎、戦争をはさんだ15年あまりを館山に暮らした洋画家・寺崎武男らの作品を、まとまった形で展覧いたします。

収集方針の二つめ「近世・近代の日本絵画・版画」からは、継続的に作品を寄託頂いている嬉遊会コレクションの中から、渡辺華山とその

師友—金子金陵、福田半香、平井顕斎、渡辺小華らの作品を中心に紹介します。

そして最後の「現代美術」の部では、小川信治、岡崎和郎、杉本博司、村上友晴の作品が集います。それぞれの研ぎ澄まされた世界観を映す作品たちが、どのような競演を見せるのか……。どうぞご期待ください。

作品に付されたキャプションからおわかりいただけるように、展示される作品の大半は近年ご寄贈・ご寄託いただいたものです。さらに言うと、その多くが当館で開催した展覧会をきっかけに、コレクションへの仲間入りが決まったものです。ご厚意をお寄せくださった皆様には改めてお礼申し上げたいと思いますし、また1995年の開館以来23年余りの歩みを振り返る時、美術館が時を重ねながら生き物のように成長し、姿を変えてゆくことを実感します。それがあべき姿とも言えるでしょう。展示をぜひご覧いただき、そして、これからの当館にもご期待いただけたら幸いです。

〔上席学芸員 西山純子〕



渡辺小華《牡丹花下戲猫之図》(嬉遊会コレクション)



吉田博《光る海／瀬戸内海集より》



ジョルジュ・ビゴー《稲毛海岸》(寄託作品)

2019

第50回記念千葉市民美術展覧会 2019/3/9-3/29

2019/3/9-3/31

所蔵作品展 房総ゆかりの作家たち 特集：銅版画家・深沢幸雄を偲ぶ

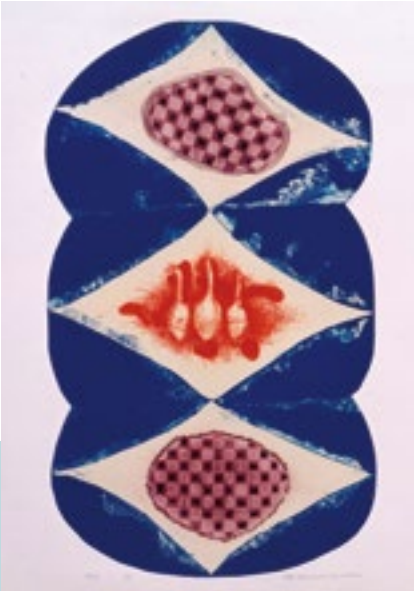
例年3月の約3週間は、千葉市民芸術祭の一環として「千葉市民美術展覧会」(市展)が開催されています。本年、市展が記念すべき第50回を迎えることとなり、この恒例の催しも少しずつ新しい方向へ踏み出そうという動きが始まりました。その一つが千葉市美術館の展覧会との同時開催です。

これまで長らく3月は全フロアで市展を開催していましたが、市展を主催する千葉市美術協会からの呼びかけを受けて、千葉市美術館としての展示も行い市展と併行して観ることができるという美術館の本来の姿に戻して、両輪で盛り上げていくということになったのです。市展の会場レイアウトを新たにし、7階展示室では千葉市美術館の所蔵作品展を

開催いたします。

テーマは「房総ゆかりの作家たち」。この新趣向に相応しいものとして千葉の美術界の先達たちを紹介いたします。まずは「特集：銅版画家・深沢幸雄を偲ぶ」として、戦後日本の銅版画の第一人者であった深沢幸雄(1924～2017)を偲び、近年収蔵した稀少な初期作品を含めてその功績をたどるほか、油彩の椿貞雄(1896～1957)、水彩の無縁寺心澄(1905～45)、日本画の横尾芳月(1897～1990)、版画の船崎光治郎(1900～87)、書の浅見喜舟(1898～1984)、陶の土肥刀泉(1899～1979)など、千葉の美術界に足跡を残した作家たちによる多様な作品をお楽しみ下さい。

〔上席学芸員 松尾知子〕



深沢幸雄《三つの卵》1966年



深沢幸雄《耳打ちをする人(A)》1983年

深沢幸雄先生のこと—「特集：銅版画家・深沢幸雄を偲ぶ」に寄せて

深沢幸雄(1924-2017)は山梨県南巨摩郡増穂町の生まれ。東京美術学校に進み、はじめ油彩画を志しますが、東京大空襲で受けた傷かもとで右膝を病み、油絵を断念して銅版画に転向しました。駒井哲郎や浜田知明に影響されながらも独学で制作を始め、メゾチントやエッチング、アクアチントなどを次々に修得。それらを独自に究め、また合わせることで多彩な表現を獲得し、銅版画の可能性を大きく広げました。昭和25年(1950)から長く市原市鶴舞に住み、はじめの個展も30年(1955)、当時千葉市美術館の近至にあった国松画廊で開かれています。最晩年まで旺盛な制作を続け、一昨年、惜しまれながら92歳で逝去されました。深沢先生(ここからは「先生」と呼びます)には、当館は本当にお世話になりました。現

在170点あまりの作品を収蔵していますが、その大部分をご寄贈いただいたほか、平成17年(2005)の「深沢幸雄銅版画展」開催に際しては、他のスタッフとともにアトリエを何度もお訪ねしてお話をうかがいました。白状しますが、展覧会の話もそこそこ、ご長女で優れたプリンターでもいらっしゃる暁子さんお手製の世にも美味しいお料理と、珍しい海外のお酒をごちそうになり、帰路はほろ酔いで小湊鉄道に乗ったものです。先生のお酒は実に楽しくて、若き日に感激したメキシコ美術の話や池田満寿夫・駒井哲郎といった銅版画家たちの話、錦絵の魅力など、話は尽きることがありません。80歳を過ぎた頃でしたが、その柔らかなおかつ鋭い感性や言葉には圧倒されました。愉快でたまらないといったその表情がありありと浮かび、先生が愛情と茶目つづいた

つぷりに「セニョリータ暁子!」と呼ばれた声が、今も耳に残ります。だらしない笑い崩れる私たちとは対照的に、先生の愛犬、甲斐犬の「大信玄」君が、静々と待っていました。私事を書くことをお許しいただきたいのですが、10年ほど前、42歳での初出産を、先生はことのほか喜んでくださいました。そして「深沢サント」自称され、愚息が小学校にあがるまで、毎年欠かさずクリスマスプレゼントを贈ってくださったのです。麗しい筆跡のお手紙とともに…。その温かなお気持ちをしみじみ嬉しく、またやはり少し悲しく思い出します。何もご恩返しできなかったと後悔ばかりが募りますが、天国の先生に心よりお礼申し上げるとともに、そのお仕事の顕彰に、これからは微力ながら努めたいと思います。〔上席学芸員 西山純子〕

友の会 バスツアー報告



昨年11月30日(金)に毎年恒例の友の会バスツアーを開催しました。

今回は、千葉県内にもまだまだ隠れた見どころがいっぱいあるぞ！ということで「眺めのよい場所と美術館を巡る」をテーマに、房総半島を巡るツアーになりました。

鋸山では石井林響がスケッチを残した房州石の石切場の跡や野見金公園では房総半島を一望する景観を楽しんだり、金谷美術館・ミュージアム as it is・市原湖畔美術館と房総に点在する三つの美術館の特色ある展示を見学したりと、盛りだくさんの内容のツアーでした。

当日は晴天に恵まれ、小春日和の陽気のもと、1日楽しく過ごしていただけたようです。「鋸山の山道はきつかったけど、眺めは良かった。」「一人ではなかなかこんなに見て回ることができないので、参加できて良かった。」などの感想をいただきました。今後もこのような会員向けのイベントを開催していきますので、友の会へのご入会をお待ちしております。

当日の行程

8:30 千葉駅前出発
→鋸山日本寺(鋸南町)
→金谷漁港「船主総本店」昼食
／金谷美術館(富津市)
→ミュージアムas it is
／野見金公園(長南町)
→市原湖畔美術館(市原市)
→18:30 千葉駅前解散



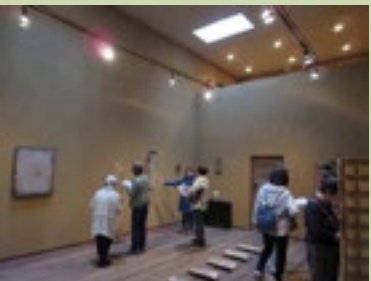
鋸山の「地獄覗き」



船主総本店の海宝丼



金谷美術館 鈴木館長から館山の歴史についての説明



ミュージアム as it is



市原湖畔美術館前に集合写真



市原湖畔美術館

新春の獅子舞

2019年1月5日(土) 開催

毎年恒例になりました、新春の獅子舞。開館時に8階会場入口で獅子舞がみなさまをお迎えし、2019年も多くのお客様にお集まりいただいての賑やかな開館となりました。

登渡神社登戸神楽囃子連の獅子舞は寿獅子。厄を除き福を招く縁起の良い獅子が軽快なお囃子とともに舞を披露し、大黒さまやおかめ、ひょっとこ面も登場するお正月らしい獅子舞です。

次回のお正月(2020年1月)は、残念ながら拡張工事のための準備休館で獅子舞はお休みですが、2021年のお正月には開催できればと思います。どうぞお楽しみに！



登渡神社登戸神楽囃子連のみなさん



軽快なリズムで舞い踊る獅子



生誕135年 石井林響展 千葉に出づる風雲児 関連イベント

新春 千葉の うまいもん!市

2018年5月に開催し好評だった「千葉のうまいもん!市」が、新春バージョンとなって帰ってきました。当日の1月12日(土)は開始時間の11:00にもチラホラと雪が舞いはじめ、このお天気ではお客様も少ないのでは…と不安な気持ちでオープンしましたが、お昼に向けて徐々にご来場が増え、賑わいは絶えませんでした。「パンとおやつのお店 おうち」さんによる、からだに優しくもちもちのチャパタは大人気につき1時間で販売終了!千葉県産の食品を扱う「まだあ〜るちば」さんでは、山武市の無農薬農園「三つ豆ファーム」さんのお野菜が販売され、夕食の材料に買っていく方もいらっしゃいました。陽の光が少ないなか、「和の花 日々花」さんにお持ちいただいた、千葉で生産されているお花

が会場を彩ってくれます。今回は「生誕135年 石井林響展—千葉に出づる風雲児」の関連イベントということで、日本酒が大好きだった林響にちなみ、千葉県産米を100%使用している「守屋酒造」さんもご出店。その場で作ってもらえるオリジナルラベルが好評でした。会場の片隅に設置したこたつで、「豆NAKANO」さんの淹れたてコーヒーや「accoffee?」さんの作る具だくさんスープをゆっくり飲まれる姿もあり、来場されたみなさんが思い思いにイベントを楽しんでいらっしゃる姿が印象的でした。

寒い中、たくさんのご来場ありがとうございました。今後もこのような千葉の美味しいもの、素敵なものをご紹介する機会をもちたいと思います。